

7月の逝去教役者の名前を見て行くと、私が大学の3年生で、初めて九州教区にやってきた頃、教区主教だった久保済主教や、この教会の牧師だった太田司祭、そして私が現在住んでいる小倉の教会で働き、昨年亡くなったコフリン司祭の名前があります。しかし、今日は6年前の7月10日になくなつた、元中部教区主教だった森紀旦主教の話から始めたいと思います。

今から30年ほど前に、私は森先生とかかわりができました。そのころ、私がイギリスの古いカテキズム、つまり教会問答の解説書を訳した時、大学生の頃に世話になった京都教区事務所で働いていた友人に1冊それを送つたら、京都教区の岡野主教や当時ウイリアムス神学館の館長だった森先生もそれを見てくださつたらしい。そしてその後、森先生が九州教区の教役者会の講師で来られた時、現在の祈祷書には、聖餐式で旧約聖書を読んだ後、「使徒書の前にその日にふさわしい詩編を用いてもよい。」という文章があるのですが、具体的にどの詩編を唱えたらいいか、示されていないという話をされました。

それで、森先生は私に「アメリカ聖公会の祈祷書には、毎週の聖餐式に合わせた詩編が書かれているので、リストを作つたらいい。作つてみないか。」と言われて、私が大分にいたころに、その作業をして、大分の教会で旧約のあとに詩編を唱えるようにしたわけです。するとその後、管区の礼拝委員会から、私の作った詩編表を使わせてほしい、という電話がありました。私は「いろいろ間違つたところがあるかもしれません、使ってくださいとありがたい。」と答えました。祈祷書にはその表は現在もありませんが、毎年発行される聖公会手帳や教会暦・日課表には、旧約の後に詩編が指定されるようになりました。

その後、私は宮崎で、ルーテル教会で知人の家族が亡くなつたので、そのお葬式に出席したのですが、その時、私たち聖公会では、詩編を唱える時、普通は司式者と会衆が、1節ずつ、交互に交読しているのですが、ルーテル教会では、各節の前半を司式者、後半を会衆が唱えていて、大変唱えやすく、気持ちよく詩編が読めることを発見して、宮崎や延岡で、その唱え方に切り替えました。

森先生は、司式者や会衆が、途中の二重線のところで、ひと呼吸おいて、心の中で「アヴェマリア」と唱えたらいい、と言われましたが、なかなかそろわない。また、九州教区のある教役者の中には、司式者と会衆が交互に唱えるのをやめて、みんな一斉に唱えることを勧める人もいましたが、ずっと声を出すのは疲れてしまうので、それは使いにくかった。そんな中で、各節の前半と後半を司式者と会衆が交互に唱える、ルーテル教会の方法は、とても唱えやすかったのです。それでこの春、小倉や戸畠でそれをやってみると、信徒の人々に歓迎されました。

詩編について、興味を持った私は、コロナウイルスが流行した頃、外出もできないので、外国の祈祷書の詩編について、調べることにしました。イギリスの古い祈祷書や、現在のアメリカの祈祷書は、日本語の文語の祈祷書にも書かれていた、150ある詩編を60に分けて、毎日朝夕の礼拝を続けていたら、1か月で詩編を全部唱えることができるよう、今も区分されているのです。例えば、今日7月18日は、朝は詩編90編、91編、92編。夕方は93編、94編という具合で、しかもそれぞれには、詩編の初めに、これは余分だと思うのですがラテン語でその詩編のタイトルをつけています。

しかし、私が面白いと思ったのは、1978年発行のオーストラリア聖公会の祈祷書でした。この祈祷書は、柴田事務所長のお父さん、柴田赳二司祭からいただいたものです。

何が面白いかということですが、この祈祷書の詩編には、それぞれ、詩編の前に簡単なその詩編の紹介文、そして詩編の後には、賛美 (Praise)、祈り (Prayer)、黙想 (Meditation)、感謝 (Thanksgiving)、などの言葉の後に具体的な事柄が短い文章で出ています。ラテン語のタイトルより、意味があります。

たとえば、私たちに親しみのある、詩編23編 「主は私の牧者」 という詩編ですが、その詩編の前には、「あなたの恵み深い慈しみは、生涯私に伴う」と書かれていて、詩編の終わりには、「善き羊飼いのイエスに賛美」と書かれています。この詩編が作られた頃には、イエス様はまだ生まれていないのですが、各詩編をキリスト教の信仰の立場から説明しているんですね。

それで、ついでに言いますと、次の日曜日の詩編は、22編23節から31節。になっています。詩編22編は長いので、二つの分かれているんです。この22編の最初の節は、イエス様が十字架の上で唱えたと言われる「わたしの神、わたしの神、どうして私を見捨てられるのですか」という所から始まっている有名な詩編です。

前半の説明は、「主イエスキリストは、ご自身が苦しみを経験しているので、試練にあっている人を助けることができる」。そして、前半の締めくくりの言葉は、「キリストの受難を黙想」とあります。

そして、次の日曜日に唱える後半部分の説明は、「わたしたちの主イエスキリストを通して、私たちに勝利を与えられている神様への感謝」と書かれていて、締めくくりの言葉は「復活への感謝」となっています。

どうして、この22編の後半が唱えられるのか、その日の聖書の個所を見てみると、福音書は、5つのパンと2匹の魚で、男だけで5000人の人たちを満腹させたお話になっています。この詩編は、前半はイスラエル民族、そしてイエス様の苦しみを思われる、受難のありさまが語られていますが、後半は、神様から祝福をうける歌になっています。だから、5000人の豊かな食事に結びつくのでしょうか。

ただ、私は今、この詩編22編のことで悩んでいます。その話をしたいと思います。

私は、英語の何種類かの聖公会の祈祷書そして日本語の祈祷書を見比べたり、またいろんな団体が出している聖書を見比べているのですが、この詩編22編の最初の節。これは1節とは限りません。聖書を開くと、1節目は解説のようになって「暁の雌鹿」「ダビデの歌」という言葉が出てくるのです。

そしてその続きの節では 「わたしの神よ わたしの神よ なぜわたしをお見捨てになるのか。  
なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず 呻きも言葉もきいてくださらないのか。」  
という疑問の形の神様への問い合わせ、訴えの言葉になっているのです。

聖公会のすべての祈祷書と、公式な聖書として出版されたものは、疑問文で、英語は?マークがついているのです。中国語の聖書にも漢字の並んだ最後には?マークがあるのには驚きました。

ただ、英語の聖書の中で、聖書の場面を線画で所々描いている、Good News Bible だけが、1節目の後半に平叙文が載っているのです。そして、6年前に出た日本聖書協会の聖書協会共同訳に肯定的な表現が出ていて、それを改定祈祷書がその部分をそのまま採用しているのです。

この二つの聖書だけ、Good News Bible (1976) と、聖書協会共同訳 (2018) だけがなぜか、疑問文の問い合わせではなく、ちょっと“さめた”表現になり、英語の場合、「.」ピリオドで終わっているのです。その例外的な聖書を書き出してみます。

22:1 My God, my God, why have you abandoned me?

I have cried desperately for help, but still it does not come. (Good News Bible)

(日本語に機械翻訳すると)

わが神よ、わが神よ、なぜ私を見捨てたのですか？

私は必死に助けを求めて叫びましたが、まだ助けは来ません。

22:2 わが神、わが神 なぜ私をお見捨てになったのか。

私の悲嘆の言葉は救いから遠い。(聖書協会共同訳) 改正祈祷書22:1も同文

祈祷書のすべてと大半の聖書が詩編第22編の最初を嘆きと問い合わせの言葉にしている伝統があるのに、どうして、このような伝統を破るような翻訳がされているのでしょうか。

この2か月あまり、時々これを調べていたのですが、聖書の中に「新世界訳」という、エホバの証人、またはものみの塔が出している聖書を久しぶりに手にしました。この聖書は聖書を正しく訳していない、と一般のキリスト教会から批判されているのですが、この詩編22編を調べてみると、面白いことがわかりました。

詩編は、歌ですから何度も同じ言葉を繰り返すのではなく、少ない単語が並んでいる中で、歌い手側、つまり読み手がその意味を膨らませて行く、という性格があるのです。そして、元のヘブライ語には書かれていないが、読み手が書いた人の気持ちを推し量って、言葉を加えて訳しているのです。その補った箇所について、この新世界訳の聖書は〔 〕で囲んで区別をつけています。

“夜明けの雌鹿”の指揮者へ。ダビデの調べ。  
**22** わたしの神かみ、わたしの神かみ、なぜあなたはわたしをお捨てになったのですか。  
〔なぜ〕わたしを救うことから、  
わたしが大声で叫ぶ言葉〔から〕遠く離れて〔おられるのですか〕。

大声で叫ぶ言葉〔から〕遠く離れて〔おられるのですか〕。私たちの普段唱える言葉と似てますね。祈祷書の詩編では「どうして遠く離れてたすけようとはせず、わたしの叫びを聞こうとされないですか。」となっています。

問題の詩編22編ですが、前半部分には、加筆した部分はありません。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」これは、「わたしの神、わたしの神、なぜあなたはわたしをお捨てになったのですか。」とすべての言葉を忠実に、訳しています。ここで重要なのは「レマ」これは「なぜ」とか「どうして」という疑問の言葉です。ところが、後半は、〔なぜ〕わたしを救うことから、わたしが

ちょっと私たちのつかっている詩編の方が長いですが、驚いたことに、後半には「なぜ」「どうして」という意味の「レマ」という言葉は、もともとのヘブライ語にはないのです。ものの塔の人たちも、この詩編を訳すのに「なぜ」という言葉を補って、文全体を疑問文にしています。

これは私たちの祈祷書や多くの聖書もそのようにして、「なぜ」「どうして」「なにゆえ」「Why」という疑問の言葉を書き加えたりしています。そして、この疑問の「Why」は書き加えないにしても、この節全体が疑問文であることを示すために、最後には疑問符の「？」マークを入れているのです。

おそらく、そのように補ってこの詩編を訳しているのは、これがイエス様の十字架の上の叫びの声だった、という印象を与えているからだろうと思います。

オーストラリアの祈祷書の説明に、「前半の説明は、「主イエスキリストは、ご自身が苦しみを経験しているので、試練にあっている人を助けることができる」。そして、前半の締めくくりの言葉は、「キリストの受難を黙想」とあるのも頷けます。

しかし、福音書を見ると、イエス様はこの最初の節の前半しか口にしておられません。続けてこの詩編を唱え続けたかどうかは私たちにはわからないのです。

そして、この詩編はイエス様がこの地上で生活されるよりも前からユダヤ人たちは伝統的に唱えられていた詩編だということも忘れてはいけません。

この詩編の初めに『指揮者によって。「暁の雌鹿」に合わせて。賛歌。ダビデの詩。』という説明がはいっています。これは、神殿で神様の前に朝のいけにえをささげるときに歌われたものではないか、と言われています。そして、「暁の雌鹿」とは、おそらくこの当時よく知られた歌の題名で、この22編はその暁の雌鹿という歌のメロディの替え歌のようにして歌われたのかもしれない、と聖書の注解書には書かれていました。

神殿での儀式の時に唱えていた詩編ですから、十字架の上のイエス様とは全く状況がちがいます。今回の聖書協会共同訳とそれに倣った改定祈祷書の詩編の変更には、私自身は頭をかしげるところがあります。この詩編をイエス様が十字架の上で唱えられたものだ、として、これを唱えてきた教会の伝統から、少し逸れるように感じるからです。これを強行するのなら説得力のある説明文がほしいところです。

また、この詩編の見直しをルーテル教会の人たちと一緒に作業をしている、というのなら、言葉の内容だけでなく、唱え方についても意見交換をしてもらいたい、それが、森主教とのかかわりのなかで私が最近感じていることです。

今日は7月の逝去教役者の記念礼拝で、6年前に亡くなった森紀旦主教との思い出や詩編について私が思っていることを話しました。